

Topic

『教育の定型』の「崩れ」と経済学

水谷良夫

“いま現代経済をどう教えるか” これは、先頃、当地で開かれた「経済学」の「教育」を主題とする催し（「経済学教育研究会」、11月22・23日）のメイン・テーマであった。そこでは、近年の大学教育、とりわけ我国に伝統的な「経済学」を中心とした社会科学の教育現場の状況——今や常態と化したかに見える学生の〈理論・歴史離れ〉や〈保守化〉、他方での教員の〈活力の低下〉や〈自信喪失〉など——が深刻な「教育危機」として意識され、それ自体が論議の主題を構成する一つの「問題」として、種々の観察結果の報告や工夫の交換が試みられていた。

今日、学校教育が「危機」に瀕しているという意識は、わが大学のみならず、広く制度化された教育体系全体を覆っていることは不幸な常識となっている。この「危機」の焦点の一つを教育現場の生の声として一般的に語らせれば、教育関係に置かれている当事者双方の「共感能力」の衰弱ということにあるようだ。教育専門家の適切な表現を借りれば、『教育の定型』の「崩れ」として「実感」されている事態の進展である（『教育』、国土社、1987年12月号）。こうした歎きの声は、『定型』の「崩れ」のもとで、この社会においては、学校教育そのものが富と権力の配分のための例の『安全弁』としての役割を一層効果的に果たし続けているという事実によって、さらに深刻なものとならざるを得ない。この意味で「問題」は、他の諸問題と同様に、個々の現場というローカルな局限性を遥かに突破して「資本主義」のシステムというグローバルな領域を求めているように思われる。

総じて、教育における「磁場」の構造的な減衰と「能力主義」の力の増幅の同時進行。（この点、S. ボウルズ・H. ギンタス『アメリカ資本主義と学校教育』Ⅰ、Ⅱ、岩波書店、は示唆に富み刺激的である。）

ところで、『定型』の「崩れ」という事態は、教育の現場に限られたことであろうか。私は、この背後には、いわば『生活の定型』の「崩れ」ともいうべき事態が、「大衆消費」と「情報化」という触れ込みのもとで、いま確実に進展しているように思われるのである。身体を持った人間の「生活の生産」の『定型』とそれを支えてきた「合理的」な準拠基準の不断の虚構化と曖昧化——それは「消費」による「生活」の絶えざる拡大・上昇期待（幻想）と「情報」による拡散・浮遊化とでも表現しうる事態、いわばライフ・スタイルそのものを「投機」化し続ける日常の進展である。この日常は、生活世界を含む『定型』の構造を不断にフィクションと化しながら、そのことによって『不定型』との境界領域を拡張し続ける圧倒的な力として作用しているように思われるのであるが。

知識の相互伝達と獲得への真摯な努力が「知」との軽やかな「戯れ」へと「華麗な変身」を遂げるという伝統的な『定型』の「崩れ」のもとでは、伝統的な「経済学」が発信する「労働」からのメッセージにもいま新たな「神義論」が求められているのではあるまいか。かくして、“いま現代経済をどう教えるか”、「問題」は、再び振り出しに戻ったかのようなのである。

（金沢大学経済学部助教授）